

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2021

課題番号：15K03286

研究課題名(和文) 近世・近代日本における科学と政治思想—蘭学の比較政治思想史研究—

研究課題名(英文) The Ideas concerning Science and Political Thought in Early modern Japan

研究代表者

大久保 健晴 (Okubo, Takeharu)

慶應義塾大学・法学部(三田)・教授

研究者番号：00336504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「科学と政治思想」という主題を中心に、近世江戸期における西洋学術の伝播と東アジアの伝統との相剋について、比較政治思想史の観点から検討することにある。

近世日本では「窮理」という儒学の枠組みを基礎に、蘭学が勃興した。そして19世紀中葉、西洋世界と対峙する中で、それらの思想的伝統を基礎にヨーロッパ人文社会諸科学の導入が図られた。本研究では、日本とオランダとの文化接触を中心に、初期近代西洋世界と東アジアとの思想的連鎖に光を当てながら、近代日本における「科学としての学問」の源流を探り、その形成と発展の特質を政治思想史の視座から文化横断的に解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、遺伝子治療や再生医療の進歩に触れ、さらにエネルギー問題に直面する中で、「科学と政治思想」の関係性や在り方を学問的に問うことは、極めて重要な意義を有する。本研究はこれら現代的課題に対し、その歴史的な起源に遡ることによって、新たな知見を導いた。具体的には、市民社会の成熟から実践科学の制度化へと至る、18-19世紀オランダの学問思想の影響に光を当てながら、西洋ならびに東アジア諸国との対比のもと、近世及び近代日本の統治と科学を巡る国際的な比較と連鎖の知性史を描き出した。そしてその成果を学術論文として発表するとともに、国際学会での報告や英語論文の執筆を通じて、国外にも積極的に発信した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the development of Western studies in Eighteenth and Nineteenth Century Japan, focusing on the cultural influence of the Netherlands seen through the lens of comparative political thought.

In the Edo period, Japanese scholars intellectually struggled with European studies through the Dutch language on the basis of the Confucian notion of kakubutsu kyuri (the investigation of things and the penetration of principle). These academic traditions served as a catalyst in the acceptance of Western humanities and social sciences during the mid-nineteenth century. In this research, I explored the origin of the ideas concerning 'science and political thought' in modern Japan by shedding light on the cultural exchange between early modern Western world and East Asia.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：政治思想史 日本政治思想史 比較政治思想史 蘭学 兵学 土木工学 オランダ 東アジア

1. 研究開始当初の背景

- (1) 本研究を開始した 2015 年当初、日本社会には 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の影響が暗い影を落とし、「科学と政治思想」の関係性や在り方を学問的に問うことが極めて肝要な意義を有した。エネルギー問題などが深刻化する 2022 年の今日、この問いはより一層、重要性を増しており、現代社会が取り組むべき課題となっている。
- (2) 本研究はこのような大きな問題意識を背景に、その歴史的な起源に遡り、近世江戸期における蘭学の勃興と展開について、西洋学術の伝播と東アジアの伝統との相剋を視野に入れながら、比較政治思想史の観点から検討することを主題とする。そこでは、「窮理の対象領域の拡張」と「視圏の拡大」がキーワードになる。その上で、徳川後期から明治期に至り、蘭学の伝統と蓄積に熟達した洋学派知識人達が、「開国」を通じていかに西洋近代と向き合い、「科学と政治思想」の枠組みを作り上げたのか、近代日本の始源に立ち戻って問い直した。
- (3) 研究開始当初の学術的背景として、これまで「開国」を巡る政治思想史については、西洋の衝撃と、それに伴うヨーロッパ文明との格闘を巡って、その世界史的な意義と政治思想のダイナミズムを描き出した丸山眞男氏の古典的業績をはじめ、国内外の多くの日本・アジア政治思想史の専門家によって深められてきた。
- しかし従来の研究では、明治期以降のイギリス、ドイツ、フランス、アメリカの政治・法学受容の研究は進んでいるものの、その出発点に位置する近世蘭学の思想的伝統を基礎としたオランダからの学術の受容については、基礎的史料調査を含めて十分に検討されていない。
- (4) 近年のヨーロッパ政治思想史研究では、Jonathan Israel, *Democratic Enlightenment* (Oxford University Press, 2011)などを通じて、スピノザやデカルト、グロティウスなど、オランダ(ネーデルラント共和国)の政治思想・哲学が世界史に与えた影響について、光が当てられている。そこでは、その学問知が、17 世紀から 18 世紀末のフランス革命に至るヨーロッパ大陸の学術及び政治運動に甚大な影響を与えたことが指摘されるとともに、それがオランダ東インド会社を通じて、東アジア世界、さらには極東の地・日本にまで伝播されるに至っていたことが明らかにされつつある。
- (5) 近世蘭学については、自然科学、医学、天文学を中心に、既に豊かな研究蓄積が存在する。しかしなお、蘭学の展開は決して狭義の自然科学や医学の分野のみにとどまるものではない。そもそも近世江戸期には、自然科学と社会科学という区分自体、明確ではなかった。例えば『解体新書』に携わった前野良沢は、オランダの「窮理学校」に触れ、「三才万物に即いてその本原固有の理を窮め、是を以て天を敬ひ神を尊び、政を乗り行を修め、事理に明らかに術芸に精しく、物品を正し器用を利す。而して帝王徳教を布き、公侯社稷を保ち、四民業を安んじ、百工巧を尽す」と説いた。こうして蘭学は、儒学に根差した東アジアの科学(「窮理」)観念を基礎にしつつ、18 世紀ヨーロッパの啓蒙主義を背景とした学術や 19 世紀の近代地理学、統計学など様々な要素を採り入れ、独自の展開を遂げた。

本研究は、以上の点から、ヨーロッパにおける先端的な成果にも目を配りながら、これまで未開拓な「蘭学の比較政治思想史」研究を試みた。

2. 研究の目的

- (1) 本研究は、日本とオランダとの文化接触を中心に、初期近代の西洋世界と東アジアとの思想的連鎖に光を当てながら、近代日本における「科学としての学問」の源流を探り、その形成と発展の特質を政治思想史の視座から文化横断的に解き明かすことを目的とする。
- (2) 本研究は、第一に、蘭学の勃興期から 19 世紀に至る中で、大槻玄沢や司馬江漢ら蘭学者によって、次第にヨーロッパの政治体制や人口、教育制度などへの関心が高まり、その後、渡辺崋山や高野長英らが地理学や兵学の先駆的導入を図るとともに、老中・水野忠邦のもとオランダ憲法、刑法、民事及び刑事訴訟法の翻訳事業が推進されたことに注目する。彼らがいかなる蘭書に触れたのか、典拠となる原典と彼らの言説とを照らし合わせながら、その政治社会認識や世界観の変容に迫った。
- (3) 第二に、近世蘭学の伝統が、開国を通じて新たにヨーロッパ法学や国際法、政治学、経済学が流入する中で、いかなる役割を果たしたのかを解明する。そこでは、蘭学を基礎に近代日本の政治社会の建設に従事した、福沢諭吉や神田孝平ら明六社知識人達の営為を取り上げた。
- (4) 本研究は、以上の作業を通じて、世界史的な視座から、江戸と明治を架橋する文化的鉅脈を発掘し、「科学と政治思想」を巡る新たな政治思想史を描き出した。旧来の一国史的な枠組みを越え、西洋世界と東アジアの学術、外交、法を巡る交渉史を比較政治思想の視座から解明し、蘭学に体现される日本近代の学問思想の特質を分析したところに本研究の独創性がある。

3. 研究の方法

- (1) 「蘭学の比較政治思想史」を主題とする本研究では、マルチ・アーカイブの手法のもと、オランダと日本国内の図書館に所蔵される一次史料を調査し、18-19 世紀日本の蘭学者・洋学者達が依拠したオランダ語原典を分析することで、その背景に広がる政治思想に光を当てた。
- (2) 2015 年から 2019 年まで、毎年オランダにあるライデン大学図書館やハーグ国立公文書館に

赴き、<18世紀後半より19世紀中葉に至るヨーロッパにおける学問思潮の変動が、徳川日本の蘭学にいかなる影響を与えたのか>という主題を中心に、自然科学から兵学に至るまで、幅広く一次史料の探索を行った。加えてその過程では、明治初年に「お雇い外国人」として日本を訪れたオランダ人技師達が残した手紙や手記、ならびに同時期に日本からオランダに渡り、デルフト工科大学で学んだ日本人留学生の記録などの貴重史料も手に入れることができた。

(3) 2018年にはパリのフランス国立図書館を訪れ、フランス革命以降のヨーロッパ政治に関する情報が東アジア世界にどう伝播したのかという主題を巡り、貴重な一次史料も入手した。

(4) こうした史料調査の成果をもとに、儒学や国学との相剋のもと、蘭学が「窮理学」として次第にその対象領域を広げる中、「科学と政治思想」に関する学識や洞察がどのような変容を遂げ、近代日本の学問・国家の礎が築きあげられたのか、考察を加えた。

4. 研究成果

(1) 本研究では第一に、徳川期の蘭学から明治期における土木工学の技術移転へと至る、オランダと日本との間の学問と科学技術を巡る交渉史を政治思想史の視座から解き明かした。その成果についてまとめたのが、論文「19世紀日本とデルフト王立アカデミー」(『アジア的空間の近代』)である。同論文では、オランダにおける史料調査の成果を背景に、18世紀における蘭学の勃興期に立ち戻り、「窮理の学」としての蘭学の背景に存在する、ネーデルラント連邦共和国及びオランダ王国の学問思潮について検討を加えた。

18世紀中葉のネーデルラント連邦共和国では、自然科学や数学の大衆化が進み、アムステルダムをはじめ様々な都市で、一般の市民をも担い手とした学会・科学協会が設立され、科学の入門書や解説書が多数刊行された。それらの書籍は海を越えて、近世日本にも流入した。

ところが1795年、フランス革命の影響のもと、ネーデルラント連邦共和国は崩壊。その後、ナポレオンによるフランス帝国への併合を経て、1815年にオランダ王国として独立すると、諸法典の編纂・制定、軍隊の再編、植民地政策の転換と植民地官僚の養成など、近代国家としての集権化が企図された。それに伴い、実践的な諸科学の制度化が推進され、1842年、植民地統治や貿易に携わる官僚の養成と、それを支えるシヴィル・エンジニアリングの発展を目的に、デルフト王立アカデミー(Koninklijke Militaire Akademie)が創設される。

こうしたオランダにおける学問的成果は、徳川後期の日本でも受容された。老中首座をつとめる堀田正睦に仕えた西村茂樹が徳川末期に訳述した作品『數限通論』は、プロイセンの官僚で統計学に精通したレーデンがドイツ語で記した *Allgemeine vergleichende Handels- und Gewerbs-Geographie und Statistik* を、デルフト王立アカデミーの講師・ブディングがオランダ語に翻訳し、そこに幾ばくかの手を加えた蘭書 *Algemeene statistiek voor handel en nijverheid* の第一巻を翻訳したものであった。

デルフト王立アカデミーが近代日本に与えた影響は、学問の受容のみにとどまらない。維新後、明治政府によって、ファン・ドールンやリンド、エッセル、デ・レイケらオランダの土木技師・工手が日本に招聘される。彼らの多くが、デルフト王立アカデミー(及び後身のデルフト工科大学)と深いつながりを持っていた。彼ら、いわゆる「お雇い外国人」はまた、オランダの植民地や租借地、海外居留地など世界の各地を渡り歩き、その経験をもとに、ヨーロッパのシヴィル・エンジニアリング=土木工学の移植を図る、帝国の技師であった。このことは、デルフト王立アカデミーがもともと植民地官僚の養成を目的に設立された歴史と接合する。

さらに、同時期に日本から留学生としてオランダに渡り、デルフト王立アカデミーの後身であるデルフト工科大学で学んだものもいた。長州藩出身の飯田俊徳である。本研究では、オランダ・ハーグにある国立公文書館における調査を通じて、同館に所蔵されるデルフト王立アカデミー、ならびにデルフト工科大学の在学学生台帳と入学者名簿の検討を行い、1872-73年の入学記録を探しあてた。飯田はオランダから日本に帰国後、工部省に入省し、日本の技師が外国技師の力を頼らずに設計・施工した最初のトンネルとして知られる京都・大津間の逢坂山トンネルを完成に導くなど、技術官僚として活躍した。

以上のように、本研究では第一の成果として、ヒト・モノの交流と知の伝播を視野にいれながら、近世江戸期の蘭学の学問的伝統を遡り、19世紀日本とオランダ経由のシヴィル・エンジニアリングとの関係を主題に、西洋世界における近代的な知が権力と連動しながら非西洋圏へと拡散・環流し、制度化され定着していく一過程を明らかにした。

(2) 西洋世界においてシヴィル・エンジニアリング(Civil Engineering)は、ミリタリー・エンジニアリング(Military Engineering)、すなわち軍事技術、軍事工学と対になる語として成立した。この言葉と概念がヨーロッパで形成され、普及したのは、18世紀後半から19世紀前半のことである。シヴィル・エンジニアリングとミリタリー・エンジニアリングの制度的な分岐は、ヨーロッパの近代国家形成と深く結びついている。以上の問題意識のもと、上記の(1)と表裏をなす課題として、本研究では第二に、19世紀日本における西洋兵学論の展開を機軸に、オランダと日本、さらにはヨーロッパと東アジアを結ぶ政治思想史叙述を試みた。論文「蘭学と西洋兵学」(『日本思想史の現在と未来』)は、その成果である。

この論文では、フランス帝国の支配を脱し、オランダ王国を樹立した後の1828年に、ブレダの地に設立された、オランダ王立軍事アカデミー(Koninklijke Militaire Acadmie)の存在に光を当てた。1815年に王国として独立したオランダでは、常備軍の再編が企てられ、当初はデル

フトの地に砲兵・工兵学校(Artillerie- en Genieschool)が建設された。その後、国王ウィレム I 世は 1826 年 5 月の勅令で、このデルフトにあった砲兵・工兵学校を廃止し、将来の全ての陸軍将校たちが、学問を基礎に軍事科学を身につけるための教育機関として、ブレダに統一かつ本格的な「王立軍事アカデミー」を創設することを決定する。そして砲兵・工兵学校が立ち退いたデルフトの跡地に、植民地官僚の要請とシヴィル・エンジニアリングの発展を目的に建設されたのが、上記のデルフト王立アカデミーであった。

本研究で明らかにするように、オランダ王立軍事アカデミーの教官たちが執筆や翻訳した軍事兵学書は、アヘン戦争後の徳川日本において、蘭学者たちによって積極的に摂取された。

ここから同論文では、高野長英訳『三兵答古知幾』を取り上げ、そこで提示される〈自由(vrijheid; vryheid)〉の観念や秩序像の特質を、荻生徂徠ら東アジアの兵学的伝統との比較のなかで分析した。高野訳『三兵答古知幾』は、オランダ王立軍事アカデミーの歩兵科教官・大尉であるファン・ミュルケン(J. J. van Mulken)が、プロイセンの将軍ブランド(Heinrich von Brandt)の著作 *Grundzüge der Taktik der drei Waffen: Infanterie, Kavallerie und Artillerie* (1833)を、同アカデミーのテキストとして用いるために翻訳し、1837 年にブレダで公刊した、*Taktiek der drie wapens, infanterie, kavallerie en artillerie* を原典とする。

こうして徳川期に蘭学を媒介に摂取された同時代ヨーロッパの兵制論は、明治維新後の近代国家形成期に重大な制度的・思想的役割を果たした。ここから、福澤諭吉、西周、神田孝平ら、明治日本で活躍した学者ならびに政府官僚たちの統治論や、そこで浮上する自由と規律を巡る政治課題が、西洋兵学論を核とする近世蘭学の展開と地続きにあったことを明らかにした。

(3) 本研究の第三の成果として、徳川末期の 1857 (安政 4) 年に公刊された蘭学者・小関三英によるナポレオン伝の翻訳書『リンデン撰 那波列翁伝初編』を取り上げ、オランダ語原著はいかなる書物なのか、蘭書原典の書誌的考察を通じて、その背景に広がる 18 世紀末から 19 世紀初頭のオランダ、フランス、ドイツの政治思想を探索した。そして、近世・近代日本の学者や政治家が、蘭学を媒介に海外情報を収集する過程で、西洋の〈自由(vrijheid; vryheid)〉概念をいかに受容したのか、考察を加えた。この研究成果を形にしたものが、論文「徳川日本における自由とナポレオン—比較と連鎖の視座から—」(『「明治」という遺産』)である。

「幕末」の志士、吉田松陰は、1859 (安政 6) 年 4 月 7 日に、佐久間象山の甥、北山安世に宛てた書簡のなかで、次のように書き記している。「独立不羈三千年の大日本、一朝人の羈搏を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレーヘッドを唱ねば腹悶医し難し」。果たして、吉田松陰において、「那波列翁 (ナポレオン)」と「フレーヘッド (vrijheid; vryheid/オランダ語で「自由」の意)」とは、どのような関係として理解されたのか。その謎を説くカギとなるのが、松陰にナポレオンに関する情報を提供した、蘭学者・小関三英の翻訳書『リンデン撰 那波列翁伝初編』である。この書は、幕末の日本において、ナポレオンの半生を描いた本格的な伝記として広く読まれ、志士たちによる「英雄豪傑」としてのナポレオン像の形成に大きく貢献した。しかしこれまで、同書がいかなるオランダ語原典をもとにした作品なのか、その書誌的考察はほとんどなされていない。

そこで本研究では、オランダでの史料調査を通じて、同書の原典である Joannes van der Linden, *Het leven van Buonaparte, naar het Fransch* の思想世界を分析した。著者のファン・デル・リンデンは、ネーデルラント共和国が解体し、バターフ共和国、さらにはフランスから派遣されたルイ・ボナパルトを王位とするホラント王国へと移行する世紀転換期のオランダにおいて、ナポレオン法典を基礎とする新たな法典編纂に深く携わった法律家であった。

さらに本研究は、フランス・パリの王立図書館における史料調査を通じて、実はファン・デル・リンデンによる *Het leven van Buonaparte, naar het Fransch* が、Johann Adam Bergk, *Lebensbeschreibung des General Buonaparte, Aus dem Französischen. Dritte, gänzlich umgearbeitete und viel vermehrte Auflage*, Paris (i.e. Leipzig), 1798 をオランダ語に翻訳した作品であることを突きとめた。このドイツ語で書かれた『将軍ブオナパルトの伝記』の著者ヨハン・アダム・ベルクは、ライプツィヒを拠点に活躍した在野の学者であり、カント哲学を革命の理論と結びつけ、「民主主義共和国」を構想した、ドイツの「急進主義」的な革命の支援者の一人であった。ベルクによるナポレオン伝には、ルソーやカントの政治哲学を基礎とした道徳的及び政治的な自由の概念が流れ込んでいる。

以上の調査結果をもとに、本研究では、日本語版の『那波列翁伝初編』、その典拠となるオランダ語版、さらにその原典となるドイツ語版、それぞれの比較検討を行った。そこからは、蘭学者・小関三英が翻訳を通じて、19 世紀ヨーロッパ世界において「フレーヘッド (フレイヘッド、vrijheid; vryheid)」が重要な政治的意義を持つことを鋭く認識し、大胆に断章取義的な意訳を行いながらも、既存の東アジアの漢語では表すことのできない、「フレーヘッド」固有の価値の一端に光を当てていることが明らかになった。こうして近代日本における〈自由〉概念との思想的格闘は、幕を開けた。

(4) (4) 上記の(2)と(3)は、19 世紀日本における〈自由(vrijheid; vryheid)〉概念の受容を主題としたものである。それに対して、本研究では第四に、19 世紀日本における〈権利(right, droit, recht, regt)〉概念の歴史的展開についても検討した。その成果が、論文「権利」(『政治概念の歴史的展開 第 9 巻』)である。

この論文では、西洋語の‘right, droit, recht (regt)’がいかにかに受容され、「権利」という翻訳語として定着したのか、その来歴を検討し、そこで展開された思想的格闘について、政治理論的な考察を加えた。

東アジアにおいて漢語の「権利」は、西洋文化との接触以前、right, droit, recht (regt)とは異なる意味で使われていた。「権利」の語はもともと『荀子』(勸学)や『史記』(鄭世家)に見られ、「権威利得」、権威・権力と利益を指した。そのことから従来の研究では、西洋世界において「正しさ」という意味を含むと‘right’と、‘power’とは、本来むしろ鋭く対立する意味を含むのに対して、日本では‘right’が「権」「権利」と訳されたため、そこに漢語の「権」が持つ「力」の要素が「混在」し、結果として「権利 right」は誤解され、時に「権力 power」の意で用いられた、との指摘がなされてきた。

しかし、日本が開国した19世紀中葉のヨーロッパでは、アメリカ独立宣言やフランス革命を準備した自然権理論を批判し、法的経験への新たな実証的接近を唱える、功利主義や歴史法学が隆盛を極めていた。西洋の<権利>概念もまた一義的ではなく、当時の人々による西洋政治理論との多様な取り組みを内在的に理解することが必要となる。

そこでこの論文ではまず、近世蘭学に遡り、『長崎ハルマ』(『道訳法児馬』)や、老中水野忠邦の命で箕作阮甫がオランダ民事訴訟法を翻訳した『和蘭律書』、志筑忠雄がE・ケンペルのThe History of Japanの蘭語版の一部を翻訳した『鎖国論』などにおける‘regt’の翻訳語や「国権」の用法について検討した。続いて、『海国図志』や『万国公法』『聯邦志略』など、清朝中国経由の漢訳洋書の影響、さらには頼山陽の『通議』をはじめとした徳川後期における「権」論の諸相を分析した。その上で、これらの学問的蓄積を背景に、1862年よりオランダに渡ってライデン大学教授シモン・フィッセリングからヨーロッパ法学を体系的に学んだ西周と津田真道、三度の渡航経験を生かして西洋政治思想と正面から取り組んだ福沢諭吉らが、東アジアの古典的世界を視野に入れながら、いかにして同時代の西洋における<権利>と取り組んだのか、検討を行った。さらに、明治10年代以降、天賦人権論争を繰り広げた加藤弘之と植木枝盛、ルソーの社会契約論を翻訳した中江兆民、ローマ法研究を通じて同時代の歴史法学や功利主義に挑んだ小野梓、さらには穂積八束らの法学的営為を解き明かした。

西洋世界という異質な伝統との遭遇を通じて、その中核にある<権利>の観念をいかに体得し、新たな国家の建設に向けて、非西洋圏である自らの政治社会のうちにそれをどう基礎づけるか。近代日本における<権利>概念の歴史的展開は、非西洋圏における法・正義・歴史を巡る政治理論の根源的な課題を内包しており、今なお実践的な意義を有していると結論づけることができる。

(5) 近年、歴史学におけるグローバル・ヒストリー(Global History)研究の興隆と連動する形で、モノの交換とヒトの移動に伴って、政治概念や制度に関する学識はどのように普及・伝播し、他の文化圏や地域において継受され、変容したのかを解明する、グローバルな知性史の研究が盛んになりつつある。それと軌を一にして、従来の西洋中心的な政治思想史叙述を脱し、非西洋圏における政治思想の展開と、そこに伏在する政治理論の可能性を検討する、比較政治思想／理論研究が、様々な形で試みられている。

本研究では、こうした世界的な政治思想史研究の潮流を強く意識し、研究成果を広く国際的に公表することに自覚的な形で取り組んだ。その一つの成果として、オックスフォード大学出版会が刊行するオックスフォード・ハンドブックス・シリーズの一冊として、『比較政治理論(The Oxford Handbook of Comparative Political Theory)』の論文集が編纂されるにあたり、英語圏の読者を念頭に、論文“The Concept of Rights in Modern Japan”を執筆し、公刊した。

(6) ドイツ、スロベニア、スペイン、ポルトガル、中国、韓国、フィリピンなどで開催された国際会議にも積極的に参加し、基調講演や研究報告、討論を通じて、本研究の成果を広く世界の学者に向けて発信した。具体的には、The 15th International Conference of European Association of Japanese Studies (Faculdade de Ciências Sociais e Humanas in Lisbon, Portugal, 2017)、「知識迁移与近代东亚的政治转型」国際学術研究会(中国・中山大学、2018)、AEJE Conference 2018 (Universidad Autónoma de Madrid, Spain, 2018)、「中国与日本之间的西学」国際学術研究会(中国・中山大学、2019)、International Political Science Association (online, 2021)において、研究報告を行った。また2019年には、スイスで開催された「グローバル知性史」(Global Intellectual History)を主題とするEUのHERAプロジェクト(Humanities in the European Research Area)や、フランス・パリで開催された「グローバル政治思想(Global Political Thought)プロジェクト」に出席し、研究を発表した。

(7) 国内では、日本政治学会や日本思想史学会において研究報告を行った。さらに、一般の読者の方々にも研究の成果を伝えるために、『よくわかる政治思想』や『オランダ語史料入門』の執筆に携わり、さらに社会思想史学会編『社会思想史事典』や日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』、洋学史学会編『洋学史研究事典』の項目も執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大久保健晴	4. 巻 48
2. 論文標題 書評論文「異説争論の際に事物の真理を求る」 松沢弘陽著『福澤諭吉の思想的格闘 - 生と死を超えて』を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福澤諭吉年鑑	6. 最初と最後の頁 3-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保健晴	4. 巻 28
2. 論文標題 ミニ・シンポジウム「洋学と陸海軍の創設(パート2)」討論報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 洋学（洋学史学会研究年報）	6. 最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 6件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 19世紀東アジアの国際秩序と「万国公法」受容
3. 学会等名 「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」第5回アジア未来会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 近代日本とデルフト・アカデミー
3. 学会等名 慶應義塾大学東アジア研究所 第33回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 [研究提言] Civility - From the Perspective of Comparative Political Theory
3. 学会等名 Fondation Maison des sciences de l'homme: Towards a Universal Political Thought
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 近代日本における蘭学と国際法
3. 学会等名 国際学術会議『近代東アジアにおける知識移転と政治変容』、中国・中山大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 International Law and its Influence on Diplomacy in the Late 19th Century Japan
3. 学会等名 Perspectives of the Bilateral Relations Between Japan and Spain, AEJE CONFERENCE 2018, Universidad Autónoma de Madrid, Spain（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 Dutch Studies in Nineteenth-Century Japan - From the View of Comparative and Connected History of Political Thought
3. 学会等名 国際学術会議『中国与日本之間的西学』、中国・中山大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 翻訳と政治思想
3. 学会等名 洋学史学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 The Study of Rangaku from the Perspective of the History of Political Thought Astronomy, Geography, Civilization
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 洋学者たちの修業時代－蘭学を巡る政治思想史的考察－
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大久保健晴
2. 発表標題 蘭学の政治思想史・試論－近代東アジアのなかの日本－
3. 学会等名 日本思想史学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Okubo Takeharu
2. 発表標題 Is There a Non-Western or a Neo-Nationalistic Political Theory? From the Perspective of the History of Political Thought in East Asia
3. 学会等名 International Political Science Association, IPSA (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 瀧井一博編著 (大久保健晴)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 596
3. 書名 「明治」という遺産－近代日本をめぐる比較文明史－(「徳川日本における自由とナポレオン－比較と連鎖の視座から－」)	

1. 著者名 日本思想史事典編集委員会編 (大久保健晴)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 日本思想史事典 (『窮理』から社会科学へ)	

1. 著者名 野口雅弘・山本圭・高山裕二編著 (大久保健晴)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる政治思想 (「開国」)	

1. 著者名 山本信人編著（大久保健晴）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 326
3. 書名 『アジア的空間の近代—知とパワーのグローバル・ヒストリー—』（「19世紀日本とデルフト王立アカデミー」）	

1. 著者名 Edited by Leigh K. Jenco, Murad Idris, and Megan C. Thomas（Okubo Takeharu）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 768
3. 書名 The Oxford Handbook of Comparative Political Theory（"The Concept of Rights in Modern Japan"）	

1. 著者名 公益財団法人 山陽放送学術文化財団編（大久保健晴）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉備人出版	5. 総ページ数 348
3. 書名 『岡山蘭学の群像 3』（研究講演「近代日本法学の先駆 津田真道」）	

1. 著者名 米原謙編著（大久保健晴）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 277
3. 書名 政治概念の歴史的展開 第九巻 「天皇」から「民主主義」まで（「権利」）	

1. 著者名 苅部直、前田勉編（大久保健晴）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 318
3. 書名 日本思想史の現在と未来－対立と調和－（「蘭学と西洋兵学－比較と連鎖の政治思想史－」）	

1. 著者名 松方冬子編著（大久保健晴）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 208
3. 書名 オランダ語史料入門－日本史を複眼的にみるために－（「オランダ語で読む明治日本」）	

1. 著者名 洋学史学会（監修）、青木歳幸、海原亮、沓澤宣賢、佐藤賢一、イサベル・田中・ファンダーレン、松方冬子編（大久保健晴）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 516
3. 書名 洋学史研究事典（「フィッセリング」「幕末のオランダ留学」「法学」「統計学」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------